

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

言語を展示するということ：
民博第7展示棟増築にともなう言語展示改装にさいして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002177

第4章

言語を展示するということ

—民博第7展示棟増築にともなう言語展示改装にさいして— 庄司 博史

1. はじめに

ことばはいかに展示できるか。これが1994年、開館以来それまで、ほとんど手の加えられなかった言語展示を改新するにあたって、幾度となく立ちかえらざるを得なかった原点であった。地球上の少なくとも4000は存在するといわれることばの大部分がそうであるように、ことばは本来音声という媒体のみを介して存在し、機能している。視覚が中心をしめる民博の展示において、このようなことばの展示には、何をどのように展示すればいいのであろうか。また文化や社会との深いかかわりはどのように扱えばいいのであろうか。おそらくこの問題は、民博開館当時の言語展示の構想においても関係者を多いに悩ましたことであろう。それから約20年、降ってわいたような第7展示棟増築決定にともない、接合部分にまたがることになった言語展示コーナーは、老朽化し始めた言語装置の入れ替えを含め改新の是非が問われることになった。すでに初期展示にかかわった和田祐一、松原正毅両氏は退官、あるいは別の職務にあたっており、常設展示の言語コーナーを担当する言語展示プロジェクトチームは言語展示改装についてあらためて検討し、新展示を立案することになった¹⁾。そこで問題になったのが上の課題であった。

2. 旧言語展示

旧言語展示において言語展示は音楽展示とともに地域展示から独立した通文化展示の一角を構成していた。これはことばが特定の文化や地域を超越する人間の普遍的な活動であると同時に、民族学や文化人類学と深くかかっていることが重視されていたためであったと思われる。

当時、言語展示の中心は、民族学というより、もっぱら言語学で記述し分析される、いわゆる言語そのものであった。それも視覚資料中心という当時の常設展示の基本路線からか、展示面積の半分近く、展示点数では大部分が文字にかかわるものであった。文字の展示は壁面のアルミ版に腐食法で彫り込んだ世界の文字のサンブ

ルと大きなガラスケースに収められた、文字の発達を示す標本によって構成されており、スペースでは文字展示コーナーの大半をしめていた。文字が人類の歴史のうえで果たした役割ははかりしれないし、音声言語の制約を一気に超越し、さらに人類を文字をもつ集団ともたざる集団に分け、さまざまな格差を生じさせたのは事実である。しかし、言語が本来音声において存在すること、世界の言語の大多数が書記体系をもたないことを考えると、文字へのあまりもの傾斜は逆に、すべての民族を対象としようとする民族学には、何となく不釣り合いを感じさせたのも事実である。

とはいえその不釣り合いは言語展示に導入されていたいわゆる言語装置によってある程度補完されていた。子音や母音の調音の仕組みや基本語順による言語タイプの標示、日本の方言の比較には当時の技術を駆使した装置が開発され、音声とともに一部動的な標示が取り入れられたことで静かで動きのない民博の展示場において特異な雰囲気のコナーであった。なか語順装置は20あまりの言語の文構造を、主語、目的語、間接目的語、述語の四つの要素の配列によって示そうとするものであった。言語ごとにほぼ同じ意味の表現が、これら四つの要素の組み合わせで文を形成していく様子は、ネイティブの音声とともに、来館者には珍しかったらしい。動的な部分はまったくメカニックであったため、ごちなく、しばしば故障をおこしていたが、団体がいる時には、ここで珍しいことばと意外な語順の発見に興じる人びとに囲まれていた。子音と母音の装置では、似かよった音どうしが、口の形や舌の位置によって、発音し分けられる様子が、動画と音声によって表示されていた。

従来、博物館などで一般の人びとに世界の言語を紹介する場合みられたのはせいぜい言語の分布図や系統図であった。それだけに、人びとが一生の間にまず顧みることさえないであろう発音の仕組みや他言語との語順の比較などに視線を向けさせたのは画期的なことであったといえる。そして少しでもことばに興味をもつ人にとっては、言語装置は言語学への明解な手引きとして有意義なものであったことも評価すべきであろう²⁾。

ただし分かりやすく説明する工夫されていたものの、発音記号や語順などは一般の来館者にいかに民族学・文化人類学にかかわるものとして理解されたか、このような言語の断片がなぜなぜ通文化展示の一角をしめているのか、ひいてはことば自体がなぜ民族学博物館で展示されているのかということに対して明解な回答を与え

ているわけではなかった³⁾。

3. 言語の何を展示するか

民族学博物館における言語展示のありかた、特にその内容を考えるにあたって、まず民族学、文化人類学と言語とのかかわりを考えてみる必要がある。

ここではいわゆる言語人類学の限定された学問分野のみを言語学と民族学の接点とみるのは適当ではない。むしろ人間がさまざまな社会活動を維持し、またその過程で築き上げてきた文化を継承、発展させるうえで基本的な部分をしめてきた言語活動全般に注目すべきであろう。ここでまず確認できるのは、ことばが人間の社会活動を営むうえでもっとも高度で不可欠な伝達手段であるという点である。一般に言語学者は、この高度な伝達を可能にしているコードの体系としての言語の側面を最重要視し、その記述と解明に没頭する。この結果、混沌としてつかみどころのないことばが、音韻、形態、統辞論的にそれぞれ整然とした構造をもつことが明らかにされ、同時にそれらに存在するさまざまな規則や分析の手法が提示されてきたのである。民族学者にとって、このような知識が研究対象となる民族や文化の解明の手段としても重要であり、場合によっては前提条件でもあることはいうまでもない。従来の民博の言語展示の主眼がこのような言語自体の構造にあったことは明らかであるが、民族学博物館の言語展示にはやはりある程度欠くことのできない要素であることはまちがいないであろう。

とはいえ民族学においては、人間にとって欠くことのできない伝達行為全体のなかで、言語の役割を確認しておくこともまた重要である。いうまでもなく言語は身ぶり、表情さらには儀礼や交換まで含めつつ、一方では記号、アイコン、シンボルなどさまざまな信号形態をとり、他方では個人や集団間でおこなわれてきた広義の伝達活動の一つにすぎない。そのなかでも言語はさまざまな特性をもち、特に生産性、緻密性においては突出した記号体系で、複雑で高度な情報伝達や思考を支えてきたのは事実である。しかし、言語学者は過小評価しがちであるが、人間の対面的なコミュニケーションにおいて、非言語的な手段によるコミュニケーションの果たしている部分は決して小さいものではないことが知られている⁴⁾。また人類自体を知る意味で、ヒトが普遍的にもつ基本的資質としてのことばの本質は、他の動物の伝達活動との比較においても明らかにされる必要がある。

ことばはまた言語集団それぞれが独自の経験を蓄積し、それを継承していくための欠くことのできない手段でもある。すべての言語は人類独自の記号体系としての普遍性を中核に保持しつつ、その多様な構造と範疇化において民族の文化や世界認識にみられる特殊性をしばしば担ってきたといわれる。人類学者の好む文化相対主義にとって、個別文化の独自の秩序と意味世界を支えてきたのは、もっとも端的な表現手段であった言語にほかならない。言語人類学は、このようなことばと文化との直接的な関係や民族の独自の認識体系をことばを手段として解明しようとしてきており、この点では民族学博物館においてこそ扱いうる領域であるといえる。

民族学とかかわりにおいて言語にはさらにさまざまな集団の統合、あるいは境界の指標としての機能があげられる。言語は人びとを分け、あるいはまとめる境界となりうるほか、時には集団の帰属意識の象徴として意識されてきた。これは年齢、地域、階層、職業集団などさまざまな集団についていえるが、言語が形成自体と深くかかっている民族と国家においては、「民族語」「国語」は政治性をおびた、意識的な支配と操作の対象となっている。民族間関係、民族と国家との関係を考える際、ことばを避けてはとおれない由縁である。

ざっとあげただけで言語には少なくとも以上の分野で言語は民族学や文化人類学と深くかかわっている。さらに民族の背景情報として、言語の話者数、系統、文字使用状況なども当然かかわってくる。しかしこれらすべてを展示しようとするればおそらく膨大な費用とスペース、労力が必要で、これだけの規模の展示を一博物館に開設するのは不可能に近い。現実には博物館それぞれの状況に応じ、これらのうちどれをとるかが決定されることになる。民博の新展示棟増築にあたって改装されることになった新言語展示においては以下のものであった。

4. 新言語展示企画までの経過

言語展示改装までのいきさつ

1993年末、急にもちあがった第7展示棟増設の決定にともない、本館との連結部分に位置する言語展示を担当する言語展示プロジェクトチームに対し、展示委員会から要望があった。展示の工事期間中の一時閉鎖と連結部分にある展示装置や展示物の移動である。さらにこの機会に言語展示自体の改装の意思の有無も打診された。

これに対応して94年2月、言語プロジェクトチームではメンバーを召集し対応策を検討することになった。閉鎖と展示物の移動は全館的な問題で異論を差し挟む余裕はなかった。問題は展示改装をおこなうかどうかということであった。

旧言語展示はすでに開館以来15年あまりを経過し、いくつかの問題や不備が指摘されていた。先にも述べたような展示全体の理念にかかわるもののほか、一時は時代の先端を風靡した言語装置もこの間に時代遅れのものになり、しばしば故障をおこしていた。また文字展示ケース後ろのアルミ壁面にはさまざまな文字のテキストが腐食法で刻み込まれているが、展示ケースの影と重なると目立たずほとんど壁の装飾として見落とされがちであった。文字展示の標本は文字発達史や解読研究のうえでは記念碑的なものではあったが、説明がやや抽象すぎたせいか言語学者以外には理解が困難に思えた。

第7展示棟増設においてはあらたに開設する情報展示、南アジア展示のコーナーおよび全面改装する東南アジア展示が主たる地位をしめ、相当の予算がつぎこまれることが予想され、いわば便乗型の言語展示にはたいした予算配分は望めなかった。つまり改装は部分的なものにとどまり、大型の展示装置を何台も導入したり、展示面積を大幅に拡大することは無理であった。そしてなにより担当する言語展示プロジェクトチームにはそれらの準備に費やす時間や労力にたいして余裕はなかった。

言語展示の将来構想

とはいえ今回の展示改装をプロジェクトチームはその場しのぎのものとするつもりはなかった。将来おこなうであろう言語展示全面改装を見越したうえで、その全体構想の一部となりうる展示をめざすことで合意した。そのためプロジェクトチームは1994年春、展示コーナーの具体的な改装案の作成が急がれるなか、数回の会合をもち、将来の言語展示の理念について意見を出し合った。その結果、この際あがった意見としては次のようなものがあった。

- ・ 言語展示の扱う範囲は言語活動のみではなく、民族のさまざまな身ぶりやボディコミュニケーションなど伝達活動を広くとらえる
- ・ 純粋な伝達活動のほか、口頭伝承の語りやことば遊びなどことばのさまざまな活動も含める

- ・ 太鼓や口笛など音声のかわりとしての准言語伝達の存在
- ・ 音声では、音のできあがる仕組みを実際に発音して体験させる
- ・ 言語の記述的構造の多様性を類型的に示す
- ・ 言語の記述的構造に加え、言語と民族の文化や認識とのかかわりも重視する
- ・ 英語や日本語の方言や社会的バリエーションなど個別言語の変種への注目の必要性
- ・ 個々の言語について、話されている地域、人口、その他、書き言葉の有無、公用語など地位についても情報を提供する
- ・ 文字展示では、個々の文字の形のほかに、文字の書き方や表記システムにも注目する

これらを総合してみると結果として言語プロジェクトチームの言語展示全体についてのおおよその理念が描き出されている。言語を単に伝達の手段としてのコードの体系や文字化された表記システムとしてのみ扱うのではなく、人間の文化・社会活動との関連のなかでとらえようとする意味において、このような展示理念は、民族学博物館の見方としては当然のことであった。そしてこの将来の言語展示では、次のような具体的なセクションが実現可能であろうということになった。

- ・ 諸民族のさまざまな伝達活動（ボディランゲージ、太鼓ことばなど）
- ・ ことばを用いたさまざまな活動
- ・ ことばと民族、国家の関係と分布
- ・ ことばの変種、方言
- ・ 文字の発達と表記システム
- ・ ことばの語順などの構造
- ・ ことばの音声の仕組みと発声法
- ・ ことばと文化の関係
- ・ ことばの系統

また今後の展示においては、地図や写真・説明パネル、文字標本資料などにくわえて、マルチメディアを用いた音声や画像による展示法も積極的に開発していく必要があるという意見で一致した。

5. 新展示の基本方針

しかしすでに述べたような事情で、今回の展示改装は、将来の言語展示構想を見据えたうえでの部分的改装という動かしがたい制限があった。そこで今回の改装の基本方針として、現存の言語装置のうち、システムとして老朽化した語順装置と母音子音の発音の仕組みを示す装置を廃棄することにした。また新規の言語装置を採用する場合は、データをデジタル化し、大型画像ディスプレイを装備したマルチメディア装置を導入することにした。その他、日本語の方言装置はディスプレイと方言選択のシステムを入れ替えるだけでほぼそのまま残す。一方、文字資料を用いた展示はさまざまな問題があるが、今回はケース内の文字標本数点と説明パネルの入れ替えにとどめる。身ぶりやサインランゲージなど人のさまざまな伝達活動および言語活動の諸相についての展示は、予算的な問題や準備に時間がかかるためみあわせる。言語と文化とのかかわりについても、マルチメディア装置やパネルなど案があがったが、結局最良の展示は将来への課題とする。一以上が決定した。

これ以降、言語プロジェクトでは新規に加える言語装置の開発に集中することにし、検討を重ねた結果、それぞれの装置の扱う内容として次のような案があがった。

- ・ 文字の形、表記法、個別文字についての情報
- ・ 発音の仕組みを表示し、来館者の発音の指導と判定
- ・ 言語の語順類型の多様性と分類
- ・ 世界の言語の系統の標示
- ・ 世界の言語の地域分布
- ・ 個別言語のさまざまな情報

展示プロジェクトでは、これらそれぞれの情報を表示できる装置に関して画面のデザイン、画面展開、操作方法など原案を作る段階まで進んだ。しかし、展示予算や装置の設計、データ収集が要する時間と労力、さらにデータ加工、装置製作などを考慮するとこれらすべての実現は無理ということであった。そこで文字と音声以外の機能にしぼって短期間に総力を結集しておこなうことになった。当初は一台の装置で、語順、系統、言語分布および言語情報が扱える装置が計画されたが、結局、語順類型装置、言語系統装置、それに言語の分布を示す装置の3種に分けるこ

とになり、個別言語の情報は各装置で標示することになった。文字、音声装置は次の展示改装の際に最優先で増設されることになっている。

6. 新展示構想の具体化

新展示装置の設計

こうして最終的に言語装置として新言語展示に登場するのは、あらたに製作される3台と改良されて残ることになった日本語方言装置の計4台ということになった。日本語方言装置は所収データが各地の昔話の録音サンプルのみで、これらを選択して聴くだけの単純なものであったため、装置の仕様や検索システムを他の装置にしたがうこととし、後の3台の装置に全力を集中することにした。比較的短期間のうちにそれぞれの装置について、扱う情報の種類、必要な情報に導くまでの検索方法と画面の階層、それぞれの画面のデザイン、さらに操作パネル、外装についてのおおまかな構想を立てる必要があった。1994年10月頃の段階で言語装置はそれぞれ、ほぼ次のようなデータ標示機能を備えることにおちついた。

①言語の分布表示装置

階層化された複数の画面上で、地図上に区分化された地域を選択し、画面ごとに絞り込み、最後に狭い地域の言語分布地図にいたる。そこで用いられている言語についての情報をみる装置である。この段階で、公用語地図か民族語地図か選択し、そこで個別言語を指定することで言語データページにいたる仕組みである。

正面の大型モニターは上下二段になっており、上は地図、下は手元のトラックボールと連動した矢印でボタンや項目が選択できる操作画面である。メニューにあげられた地域名を選択すると、正面の大型モニターに表示された地図上に、選択された地域が濃い赤に反転する。たとえば、ヨーロッパ→北ヨーロッパ→民族語地図→フィンランド語→言語データページとなる。データページは二層になっており、第一層目では、文字をもつ言語の場合、文字サンプルテキストとその言語の分布、話者数、文字言語の歴史、言語の地位や方言、その他特徴が文字情報で与えられる。その画面から、指定の音声ボタンを押すことで、ネイティブ話者による自由な内容の音声サンプルが聞こえ、その人物の写真が標示される。また言語情報を耳で聞くことも可能である。言語名が特定されている場合、最初の画面から言語名メニューに進み、直接言語データにいたることも可能である。

この装置の特徴の一つは言語分布地図で混同されがちな、公用語の分布と母語として話されているそれ以外の言語＝民族語の分布を区別したところにある。多くの場合公用語としての多数派語によってべったり一色に塗られている地域も、民族語地図では多くの小言語が存在することを知ることができる。インフォーマント写真を表示するのは、来館者の興味を想定したものではあったが、音声とともにその人物の肖像に接することで、身近に、また生きたことばとして用いられていることを来館者に感じとってもらうためでもある。

②言語系統装置

この装置では、世界地図に色分け区分された主な言語語族から、画面の階層を繰ることで、より小さいまとまりである語派、語支等、中位の系統集団へ下り、最後に同様の個別言語にいたる。言語データページは言語分布の装置と同じである。例として英語の場合、インドヨーロッパ語族→ゲルマン語派→英語→言語データページとなる。この装置も上と同じように、下の操作画面では文字による選択肢メニューから希望するものを指定し、上のモニター画面では選択された語族、語派などが地図上に暗赤色で示される。

従来、言語の系統を表示する手段として、民博の地域展示も含めほとんどの場合、語族や語派などに色分けされた地図が用いられている。しかし一葉の地図上では、平面的に語族あるいは語派いずれかの言語のまとまりしか表示できず、系統の上下関係にあるまとまりの階層性は理解しにくいものであった。新展示の系統装置では、画面操作で同じ地域の言語の系統地図を語族⇄語派⇄言語の間で上下移動することが可能で、系統の階層性が理解しやすい。

③語順類型装置

基本的には旧言語展示の語順類型装置のアイデアを踏襲し、諸言語の文の構造を、主語、述語、間接目的語、直接目的語の配列からみる装置である。旧語順装置では個々の言語を日本語の語順と比較するだけであったが、新装置ではさらに語順を先に選択し、該当する語順をもつ言語を検索することが可能である。個別言語についてのデータはこの装置でもみることができる。語順を比較するための日本語の例文として「<おばあさんは><子どもに><昔話を><語る>」を表示し、それぞれの語に対応するイラストのピクトグラムをならべる。特定の言語名からその語順を調べる際には、言語メニューから言語が選択されると次画面では語順にしたがって

意味的に該当するピクトグラムがならび主語、述語などの位置関係がわかる。その下にはラテン文字による文が表示され、ネイティブの発音を聞くことができる。特定語順から言語を検索する場合は、まず日本語の例文のピクトグラムを順に選択し、並べ替えて語順を設定する。次画面では相当する言語のリストがあらわれ、ここで言語を選択すると上と同じ画面で例文があらわれる。

この装置は言語の文の基本構造を多言語にわたって表示するが、その意図するところは大きく二つある。まず、来館者にとってはまったく不可解な外国語の多くが、文の構造では、日本語と同じく主語、述語、目的語、間接目的語の要素によって構成されていること、つまり言語の構造にある程度の普遍性が存在することを示す⁵⁾。他方で、地理的、系統的な近遠関係をこえて言語の間で観察される語順の多様性は、言語間の違いを理解するための好例である。とはいえ同時に語順の多様性にもいくつかのタイプへの類型化がみられ、一定のまとまりの傾向があることの発見につながればさらによい。技術的に大きな問題は難解な言語学用語を用いずに説明することで、そのために語順装置では画面上具象的なアイコンが利用されることになった。

このような機能を備えた装置の設計にあたっては、我われ研究者のコンピュータに関する知識には当然限界があり、装置の機能と使用法のほかは、おおまかなアイデアを提示するのみで、原案作りも専門とする業者にまかせざるを得ない。装置の外装、ハードについての設計は1995年の3月にはほぼ完了していたと記憶している。ただし、それぞれの言語装置でデータ検索をおこなうソフトにおいて、特に画面の階層化は、データ自体の階層性、データ項目数などと深くかかっており、ソフト製作を担当した業者と96年春まで、試作品を元に幾度となく調整をおこなっている。

通常、検索画面上に視覚的に無理のない程度に配置できる選択肢は限られている。また、データの階層化は論理や現実に沿った形で、なるべく少ない数で処理し、目的の画面に到達できるようにすることが重要である。そこで使用者の立場から個別言語へはせいぜい第3画面以内で到達するのが妥当ということになった。そのため言語分布、言語系統双方の装置とも二層の画面に前者は大地域→中地域（→個別言語）、後者は語族→語派（→個別言語）の系統パスにしたがったツリーシステムを盛りこむことになった。私はこの原案作成を担当したが、この3層によるシステムに諸言語を収めることは容易ではなかった。

系統装置では、たとえばアフリカのスワヒリ語の場合、通常ではニジェール・コルドファン大語族、ニジェール・コンゴ語族、ベヌエ・コンゴ語派、バントゥー諸語を経てたどり着くのであるが、画面では「ニジェール・コンゴ語族」→「ベヌエ・コンゴ語派」→「スワヒリ語」というように大きく簡略化せざるを得なかった。また南北アメリカの諸語にいたっては、数十もあるという語族を項目として立てず、すべて第一画面の「その他」の大項目から、直接言語メニューを開け個別に選択する方法を現在はとっている。この点アメリカ諸語研究の立場からは、これら諸語を軽視しているにとられても仕方がない。しかし語族選択のメニュー画面に収納できる項目は煩雑さを避けるうえから押さえざるを得ず、比較的重要であると思えるものに限った。語族といっても、下位にある語派や言語の数に基準があるわけではなく、またそれらの系統関係の実証度にも幅があり、必ずしもすべての語族を同じレベルで扱う必要はない。実際には、語族、語派、語支、諸語、語群といったことばのまとまりを示す用語は、それぞれの言語系統研究者の間で個別の合意のもとに使われていることが多い。

分布装置の場合、検索画面に用いた区分と地理学上の区分を一致させるのが困難であった。前者では画面上の地図の大区域、中区域への区分は、それぞれ面積や形状、選択項目の配分上のある程度のバランスが理想である。しかし、アフリカ、ヨーロッパなど地理学上の概念ではそれぞれの地域の面積、形状、およびとりあげるべき言語の数に大きな格差がある。結果として検索画面上では独自の区分を用い、必ずしも地理学の区分とは整合しない部分もでてきた。たとえば「ヨーロッパ」と「オセアニア」の場合、地理学上の範囲を画面でも大区域として独立させたため、言語の数では「ヨーロッパ」がはるかに多く入力を予定されているのにたいし、面積では「オセアニア」が数倍の地域をカバーすることになった。画面上の言語密度のバランスをとるため、その下位区分である中区域への区分は、前者が「北ヨーロッパ」、「西ヨーロッパ」、および「南・東ヨーロッパ」に3分割したのに対し、4分割にとどめた後者では広大な「南太平洋」が一つとしてたち、「オーストラリア」、「ニューギニア」、「ミクロネシア」となることになった。このレベルでも、前者と後者はそれぞれ面積、言語数において大きな差は残っている。またヨーロッパの下位区分では「南・東ヨーロッパ」が項目としてあるが、これは地理学上の概念としてではなく、画面編成上の理由によるものである。

データ収集

装置のおおよその機能が明らかになった1994年秋の段階で、それらに取り込むデータの収集計画に急いでとりかかった。これらの言語装置に用いる言語データは、話者数、分布、系統、文字資料など我われの手元にあるもの以外で、語順装置の例文、発音、および言語情報の画面で聞く自由発話はネイティヴから直接収集するという方針を立てた。その他にもいくつか原則をもうけた。言語の選択は、語順類型、地理分布、系統の観点から、全体として完成時にできるだけ均整のとれたものとする。また言語ごとに担当者を決めることにし、その言語に関する必要なデータは担当者がすべて収集する。言語ごとにインフォーマントは可能な限り一人とし、3台の言語装置には同じインフォーマントのデータを用いる。インフォーマントからデータ収集する際には、統一したフォーマットを用い、質問項目を統一する。言語データとしての価値を高めるために、語順の例文のほか、3、4の基本的な表現とインフォーマントの個人的データも記録する。ただし後者の公開はおこなわない。こうして、言語データ収集には、インフォーマントから次の情報を求めることになった。

1) 言語の民族語による名称、書き言葉の有無、公用語等の地位についてなど知っているデータ；2) インフォーマントの個人的データ（名、住所、出生地、出生年）の母語による発音を録音し、文字でも記録；3) 語順類型用の言語例文2文の音声、文字データを録音・記録する。；4) 言語データ画面で用いる自由発話を1分のほど録音する。内容は自由とする。；5) インフォーマントの写真。公開の許可を得ておく。例文のデータは可能な限り、本来の表記法とラテン文字での転写で記録する。

語順装置に用いる例文は、旧語順装置では「<父は><息子に><手紙を><書いた>」であったが、言語によっては<手紙><書く>という語がないという理由で、別の文を用いることになった。「子どもが犬に骨をやる」「少女が母に花をおくる」など候補にあがったが、「犬」が文化によっては否定的な意味をもったり、これらのような慣習がない場合もあるということで、結局どこでも比較的通用しそうな「おばあさんは子どもに昔話を語った」になった。ただし、この文も後、各言語に訳してもらった段階での問題が予想された。<おばあさん>は「老女」あるいは「祖母」か、<子ども>は「(その) 子ども」か「(不特定の) 子ども」か、言語に

よっては語彙の違いだけではない場合がある。後者の場合では、語順にさえ影響する可能性がある。さらに、＜昔話を＞＜語る＞という表現は、言語によっては一語で表現したり、日本語のように＜語る＞という語を用いず、＜する＞という語が用いられる場合がある。結局これらの問題は、日本語の例文にある程度相当する文で、4部分からなる自然な表現であれば用いることにした。

民博の言語関係スタッフを中心にデータの収集は1995年をはじめからとりかかったが、当初、データを加工し、装置へ入力をおこなう業者に手渡す最終期日に間にあうと予想できた言語数は総数で93であった。そのうち52言語は語順類型装置にも用いる予定であった⁶⁾。採用されることになった言語の選択は全体的なバランスがとれるように考慮されたが、当時民博の言語スタッフの関係する言語に偏りがちであったのは否めない。今回の言語展示改装を主に担当していた庄司、崎山が専門とするウラル系、オーストロネシア系の諸言語の多くは世界的にみると、2、3の例をのぞき話者の数や勢力、周知度からいうとあまり目立った言語ではない。ヨーロッパ、アフリカ等カバーしきれない地域の言語では、当時民博に何らかの形で席をおいている研究者や研究部の同僚を通じて共同研究員などにデータ収集を要請するケースもあった。なかでも当時民博でCOE研究員として在籍されていた小森淳子氏は、専門のアフリカ諸語を中心に、ヨーロッパ、アジアの言語など合計16を収集してくれた。

情報システム課の貢献

3台の言語装置に入力する各言語のデータは、インフォーマントから収集するもののほか、言語プロジェクトの担当者が、系統、話者人口等のデータ、民族語・公用語としての分布地図、表記体系をもつ言語ではテキストサンプル、語順装置用の例文のラテン字転写テキストを準備することになっていた。これら文字資料、録音物、写真、図として収集される膨大な量のデータは煩雑で、また一度に集まるものではなかった。遅々として進まぬ研究者のデータ収集をせきたてながら、情報施設課はデータのとりまとめと整理、管理を担当した。言語装置ごとに入力する言語データは当然異なっており、一人で20以上の言語を担当するため、収集者本人でさえ、データの集積状況の把握は曖昧になりがちであった。情報システム課が装置ごとに

最新の詳しいデータ収集状況を逐一まとめ、督促してくれたことで、多くの人びとがかかわったデータの多くは、1996年11月の公開にやっと間にあう期日、9月中旬までには整えることができた。これらのデータは96年はじめより順に業者に送られ、文字、グラフィック、写真、音声データともデジタル化され、後まとめて言語装置に採用されることになっていた。これらのデータを操作する言語装置それぞれのアプリケーションは、当時最新のコンピュータシステムとして採用されたウィンドウズ3.1上で動くよう製作されていた。

7. 新言語展示の完成

システムの完成、情報の入力

言語装置のハード機器は、要求した条件を盛りこんだ仕様書にしたがいメーカーにより製作されていたが、第7展示棟工事がおわり、言語展示場の内装が並行しておこなわれるなか、ほぼ1996年3月末完成し納入された。夏前にはデジタル処理化がすんだデータの一部が試験的に入力され、操作の手順や画面の調整がおこなわれた。

また一方では、手渡されたデータを画面で確認する作業も開始された。特に注意を要したのは、個々の言語や語族などの分布を示す地図であった。来館者は地図上で特定の言語の分布や特定の地域で話される言語に関心を示すことが予想され、できるだけ正確に表示する必要があった。音声データでは提供された音声の質が問題となった。言語プロジェクトのメンバーは言語学にかかっているとはいえ、録音の専門家ではない。録音レベルの差はまちまちで、雑音も多かった。筆者が外国でやむを得ず戸外で録音したものにも、車のエンジン音にほとんどかき消されているものがあつた。語順装置ではラテン文字に転写した形で表示される例文のチェックに細心の注意が必要であつた。特殊なラテン変形文字や符号を用いる言語は、我われが作成したテキストをそのままグラフィックとして取り込んだものがあるが、多くはテキストを業者側で再入力したものであつた。そのため手書きの原稿が誤って読みとられたり、誤写される場合があつた。画面による言語検索では、操作の途中、突如まったく別の系列にとんでしまうこともあつた。システム開発、データ入力の業者では必ずしもデータ内容にまでチェックが行き渡るわけではない。データの収集がひと段落ついた9月以降も、公開までこのようなチェックが続いた。

新言語展示の公開と反響

言語装置の公開は1996年11月12日、第7展示場とともにおこなわれた。公開に間にあった言語数は言語系統、分布の装置では100言語、語順装置では74言語であった。当日言語展示プロジェクトのメンバーが展示場において各装置の説明をおこなった。公開では第7展示棟の情報展示や南アジア展示、大幅に改装された東南アジア展示などがメインであったためか、広報では言語展示にはほとんど言及されなかった。そのためか、言語展示にかかわった多くの関係者の期待にもかかわらず、来客の言語展示への関心はいま一つという印象であった。しかしその後の一般公開では、言語展示の言語装置に立ち止まる人びとは多く、中には長時間ほとんど装置を独占するように没頭する人びとも目立った。特に団体の場合には、個人ではふれる勇気のない人も装置に群がり、次から次へと画面を検索する光景は珍しくない。一般に中学生、高校生の団体の関心が高いようである。言語装置のなかでは、方言装置と語順装置が人気があり、ついで言語の分布を表示する装置に人が集まるようである。

一方言語装置についての具体的な意見であるが、公開当初は個別言語のデータに関して来館者からのいくつか質問や疑問がよせられたが、取り立てて重大な指摘はなかった。総じて民族学者より言語学関係の研究者は言語装置の特色やデータの価値を評価してくれるようであるが⁷⁾、逆にこれが言語学よりの展示になってしまったことの証左でもありうる。

言語展示場の面積の大半をしめる文字展示のコーナーは相変わらず素通りに近い状態である。それ自体には歴史的な価値のある文字標本でも、脈絡から切り離されたものであるためか、ほとんど関心をひくことない。ロゼッタストーン、居庸関の文字標本の複製しかりである。

問題点

特に来館者からの指摘があったわけではないが、新言語展示には根本的なものから微細なものまで含めいくつかの問題が生じている。ここでは新言語装置に限って改善すべき課題を指摘しておきたい。これらにはデータ自体にかかわるもの、画面デザインや画面操作等データの検索、データ表示アプリケーションにかかわるもの、さらにハード装置本体にかかわるものがある。

データの面では改善の余地は大きい。言語系統、分布装置で試聴できる自由発話の音質の問題はすでにふれたが、内容、長さが不ぞろいで、さらに内容についての情報がまったくない。自由発話の録音を取り逃した言語では1、2秒の語順装置の例文で代用しているケースがある。また内容に関しても、今後おおよその情報は与えるべきであろう。これは表示される文字テキストサンプルについてもいえる。なかにはテキストとはとてもいえない、文字をならべた程度のものがあり、少なくとも文の形態の整っているものに入れ替える必要がある。また場合によっては、インフォーマントとして協力してくれた人について、プライバシーに抵触しない程度で、出身地と姓ぐらゐは写真に添えることも考えられる。一方でデータの信頼性をたかめ、記録者の責任を明らかにする意味で収集車、作成者の記名も必要かもしれない。また言語の分布を示す地図は、国境や川、あるいは都市名など相対的範囲を示す指標がなく、理解が困難である。煩雑になるのを回避しながらも何らかの指標は必要であろう。

画面デザインや操作の手順については、まず、言語分布装置に表示される検索のための地域区分の問題がある。画面上の地域区分は必ずしも地理学の概念に沿っているわけではなく、地域の形状や所収言語数において調整をおこなったり、まったく便宜的な名称を与えている場合があることは先に述べた。しかし、なか地理学上の通念とはなはだ離れすぎ矛盾しているととられても仕方がない場合がでてきている。たとえば「東アジア」では、その下の中区域として「中国」と「日本・朝鮮」としたために、排除されてしまったモンゴル語は中区域である「中央アジア」に入っている。この「中央アジア」は、「南アジア」、「西アジア」とともに大区域である「西・南アジア」に含められている。したがってモンゴル語も結局は「西・南アジア」の一部ということになり、明らかに現実と矛盾することになる。このような問題はいずれ全面的に調整しなければならない。

また基本的に個別言語はそれぞれ一つの地域からしか検索できないのも問題である。検索画面では、たとえある言語の分布地域が、いくつかの異なる区域の地図上におよんでいたとしても、すべての区域の地図からその言語にたどり着けるわけではない。たとえばトルコ語の分布は、「南・東ヨーロッパ」、「西アジア」双方の地図上にかかっているが、検索できるのは「南・東ヨーロッパ」地図からだけである。

一方地域的にほとんど同じのクルド語では西アジアから検索するようになっている。検索の手順を担当した本人が認める欠陥であるが、分布地図の作成等に手間取り、こうした問題に気付いたのは後になってからである。検索画面の便宜的な地域名称にはこだわらず、分布がおよんでいるどの地図からも検索可能にする必要がある。また言語分布地図からは、同一地域内でしばしば重層的に話されている複数の諸語の存在が即座には読みとりにくい問題もある。

言語系統装置では、はじめの語族のメニュー画面には主な10語族のみをあげ、あとは語族としてまとめず個別語として「その他」に収納している。現在このカテゴリには約20言語が入っているが、増加の傾向にある。なかアイヌ語や日本語のように系統の不明なものがある一方、コーカサス諸語に属するグルジア語のように系統的にまとめられている言語もある。すべての語族を最初のメニュー画面にあげることは不可能であるが、「その他」の下に中間カテゴリとしていくつかの主要な語族をあげることもできよう。

語順類型装置では、どうしても検索システムにのりにくい言語がある。この装置は、日本語の例文に対応する表現は日本語と同様に、構文的に4要素から成立していることを出発点としている。しかし、世界の言語を対象とすることになるとこの形に収まらない言語も当然対象にしなければならない。語順類型を含めた文構造の大類型装置も扱う装置が考えられるかもしれない。画面展開に関してすべての装置についていえることでもあるが、操作を途中で中断した場合、単に前面や開始画面に戻るだけでなく、最初に選択したメニュー画面に直行する方法も望まれる。またすべての装置で、言語名リストからの検索は、ページの切り替わりが遅く不便である。これもスクロール方式などを採用する必要がある。

装置本体についての問題もある。画面操作は言語分布装置と系統装置ではトラックボールやボタン、語順装置ではモニター操作画面での指タッチによっておこなっているが反応がわるく、また非常に遅い。画面に残る残像もやっかいである。特に長く静止状態でとどまる第一画面の残像は検索中はっきりと残り、情報が見づらいほどである。

言語装置に共通する問題で最大のものは、データの追加、修正が館内のスタッフだけでおこなえず、外部の業者に頼らざるを得ない点である。上にあげた問題のい

くつかは現在なら民博の専門スタッフで対処されるべきものである。1999年開催した特別展「越境する民族文化」の言語コーナーではモニター画面でさまざまな情報を公開したが、情報システム課でデータ加工から画面デザインまですべて処理し、データの追加や修正も随時おこなった。ウィンドウズ3.1から98への基本システムとデータ処理ソフトの発達がおそらく原因であると思えられるが、わずか4、5年の技術の差がいかにともしがたいハンディキャップを言語装置に残してしまった。

現状

展示公開の翌年には、データの修正、追加および画面のにじみやズレにたいして若干の調整がおこなわれた。画面の調整は緊急のものに限られ、特に上にあがったような画面のデザイン、検索システム、画面の遅い展開速度等などに大幅な変更は行っていない。言語分布、系統装置では、公開当時データがそろわなかった言語、新しく収集した言語など20が追加され、またデータ自体の数字や文字、文例など修正がほどこされた言語もある。語順装置では24追加され、収納許容量はほぼ一杯となった。しかしその後は、いずれの言語装置にもデータ追加をふくめ、ほとんど手を加えられていない。

とはいえ言語分布装置、言語系統装置に追加する個別言語のデータは、言語展示プロジェクトとして、欠けている言語を中心に毎年数件ずつデータ収集をつづけている。2000年4月現在これらの装置に入力されている言語数は120言語、語順装置には96言語があるが、さらに8言語のデータが収集されており入力をまっている。しかし、現在このような装置が他にないことを考慮すると、今後も言語データは継続し、場合によっては外部の助力をえても行う必要はあろう。

ところでこれらインフォーマントによるデータを中心に、各言語についてのデータは一人の担当者がまとめることは先に述べたが、入力後のデータ管理、およびデータについての情報の管理が重要である。入力されたデータは破損し修復が必要な場合があり、インフォーマントに関するデータ、収集状況や収集者についてのデータも重要である。これらは収集担当者から一時は情報システムに集められているが、係りの異動とともに記録は散逸するおそれが十分ある。さらに後になって外部からデータについての問い合わせなどがくる可能性もある。収集者の記憶がまだはつきりし、データ自体も残されているうちの集中的なデータ管理が急務であるとして、

筆者は1997年、民博リサーチアシスタント予算により総合研究大学大学院生2名の助けて、収集データについての情報のまとめとコンピュータへの入力をおこなった。残念ながら、すでに記録に残されていない収集データもあったが、多くはコンピュータに入力することができた。記録したデータは、録音物については、録音者、録音日時・場所、インフォーマントの個人データ、語順例文の作製者；写真については、撮影撮影者、被撮影者（上のインフォーマントと異なる場合）、文字サンプルに関しては出典などである。

8. 将来の言語展示の課題

あらたに3台の言語装置を導入し、改装を行った新言語展示ではあるが、根本的なところでは、旧言語展示からほとんど前進していない。構想の企画が始まった段階では、言語展示は非言語的コミュニケーションを含め伝達活動全体を広くとらえ、また他方では言語を用いたさまざまな活動のなかで、言語と民族や文化とのかかわりをみることも視野に入れていた。しかしこれらは新展示の実現段階で、またすっぱり抜け落ちてしまった。言語と民族学との要の接点のない展示になっているのである。これは将来の言語展示では実現すべき課題である。さらに、今回の言語装置では導入できなかった、文字と音声の装置は言語の基本を説明するうえでこれからの言語展示にはやはり欠くことができない。次期の展示更新においては是非開発したい装置である。

現在民族学、文化人類学は現代、民族をとりまく状況が大きく変化するなかで、学問としてその立場を問われつづけている。この傾向は今後さらに強まるに違いない。であれば、民族学との接点におかれた言語展示とて、とりまく社会や文化が激動するなかでことばが無関係でありつづけ得ないのは明らかであろう。実際、多くの少数民族、先住民族がその存在をかけて運動を展開しつつあるなかで、言語の存続は特に象徴的な意味を担っている。危機言語への関心が特に高まっているのもそのあらわれであろう。このような運動において、重視されているのが、書き言葉をもたなかった言語の文字化の動きである。これは主流派民族やその言語に支配されてきた人びとにとって、集団としての意識を高め、また文化的自立性を保障するための条件とさえなりつつある。言語展示では言語のもつこのような側面も当然取りあげていくことになるだろう。

また一方では、特に西側先進社会にみられる多民族化によってもたらされつつある多言語化がある。日本をとってみれば、ほんの最近まで、日本社会は、日本語のみで運営されているとみなされていた。しかし実際には人口の1.5%に達する外国人とともにさまざまなことばが入り込み、地域によっては中国語やポルトガル語の案内が行政や営業上不可欠な場合も出現しつつある。世界中で都会を中心に多言語社会が形成されつつある現在、多言語状況を特殊視するのではなく積極的に共同体の一つのありかたとして展示に取り入れていく必要があるだろう。

注記

1) 言語展示プロジェクトチームのメンバーは当時、江口一久、崎山理（代表）、庄司博史、長野泰彦、野村雅一、八杉佳穂であった。新展示の構想立案からデータ収集のまとめの作業は主に崎山と庄司が担当した。

2) 当時、言語展示がいかにか画的なものであったか、和田祐一教授が大きな期待と意気込みで企画されたいきさつが本人により記されている（「言語手示装置ものがたり」『月刊みんぱく』14巻2号、1990年）。そのほか、和田祐一氏は言語展示について、以下の記事で解説している。「Q & A（ドイツ語の語順と語順類型装置について）」（『月刊みんぱく』4巻4号、1980年）、「展示紹介－言語」（『月刊みんぱく』2巻9号、1978年）。

3) 言語と民族学のつながりが、展示企画者の観点から抜けていたわけではない。当時の常設展示場の解説書『総合案内』では、言語展示について担当された和田教授により、イントロ部分で言語と民族、文化とのかかわりが丁寧に解説されている。（「言語」『国立民族学博物館総合案内』1977年）。

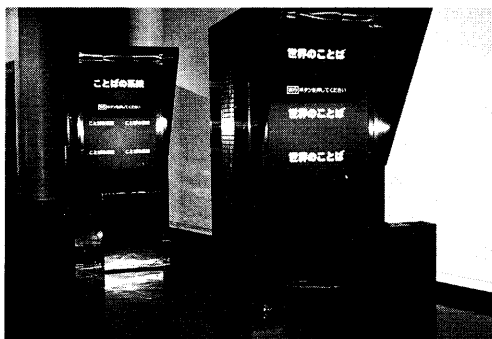
4) 一説では言語による情報は35%であり、残りは非言語表現によるともいわれる（永瀬治郎「外国語によるコミュニケーション」『日本語学』11巻12号、1992年）。

5) 実際にはすべての言語が4つの要素で、日本語の例文に相当する分を構成するわけではない。よくみられるのは直接目的や間接目的語にあたる代名詞などを前承語として動詞の前におき、本来の語は動詞の後ろで表現する例である。直接目的語が二つ以上存在するこのようなケースは4要素の語順類型には当てはめるのが困難である。また、いわゆる輯合語というタイプの言語では、分の語への分離が必ずしも明確に行われているわけではなく、語順類型への分類が無理な場合がある。さら

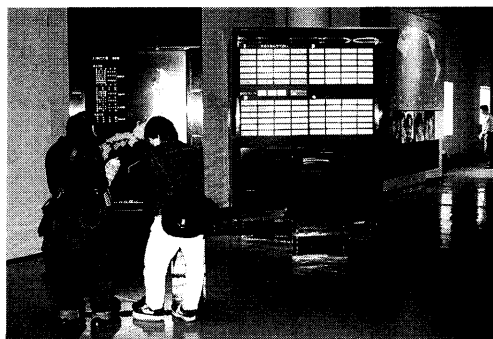
に能格言語というタイプのように、一般的な主語、述語、目的語という文構成要素とは異なるカテゴリーをもつものもある。言語の構造の類型分類にはこのような観点からも行うことが可能であるが、それは言語学の領域で扱われるものであろう。

6) 装置事態の技術的な面から語順装置では訳100言語が入力可能である。言語系統、分布装置では数百言語まで入力可能である。言語展示プロジェクトとしては当面200言語を目標にしている。

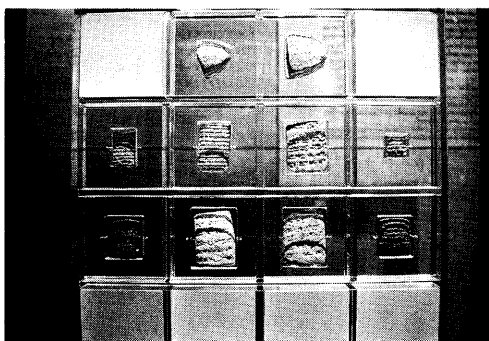
7) 言語学者の井上史雄氏（東京外国語大学）はこのような評をおこなっている。（「世界中」あちこち回って帰ってから、思いついて大阪の国立民族学博物館へ行った。日本各地の昔話がボタンを押すと聞こえてきて人気があったし、世界のことばの見本が自在に聞けるコーナーもある。燈台下暗し。ことばについては日本の展示が最先端にあることを発見した。」（「ことばの博物館」『日本語学19巻2号』、2000年）



「世界のことば」「言語系統」装置

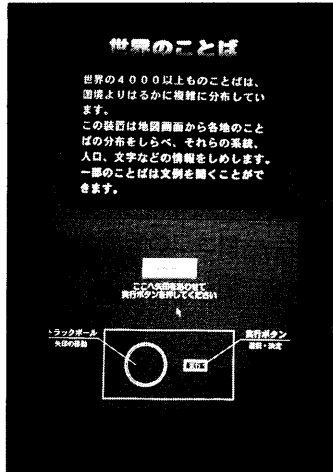


「日本の言葉」「ことばの語順」装置

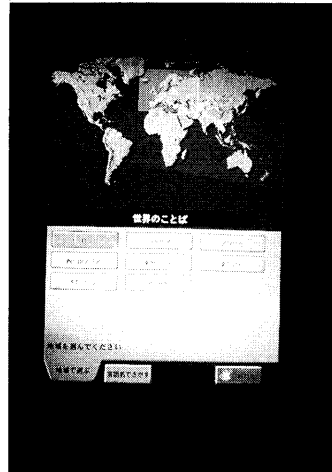


シュメール楔形文字

写真 世界のことば装置（言語の分布）検索システム（6点）



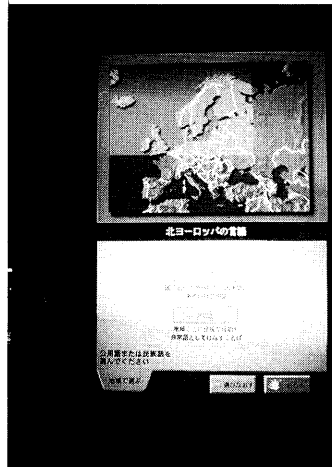
1



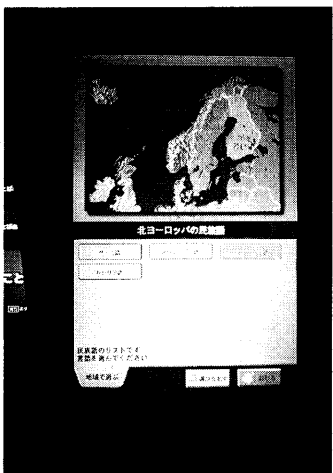
2



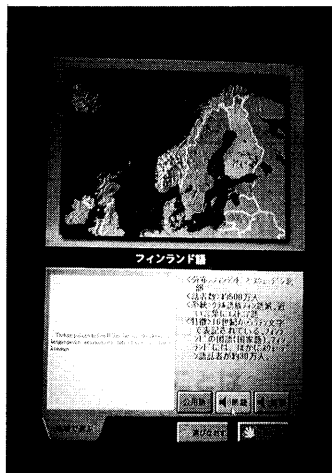
3



4

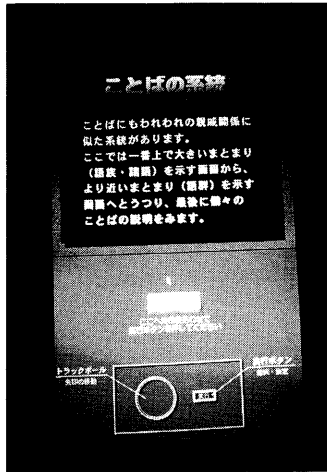


5

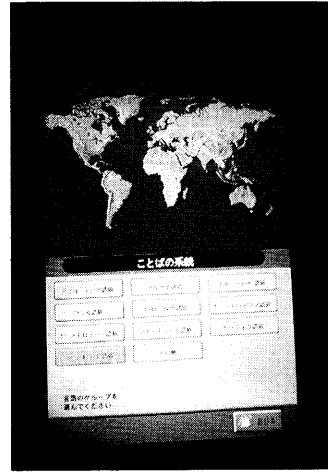


6

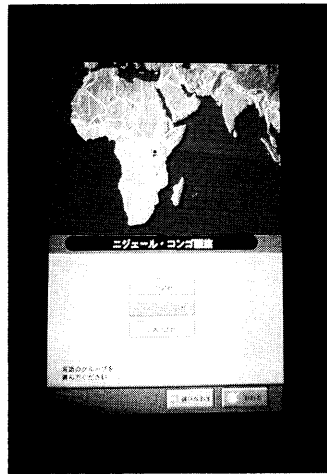
写真 ことばの系統検索システム (5点)



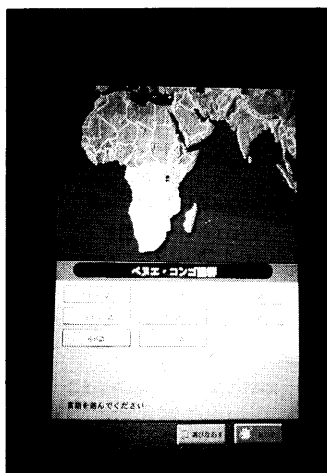
1



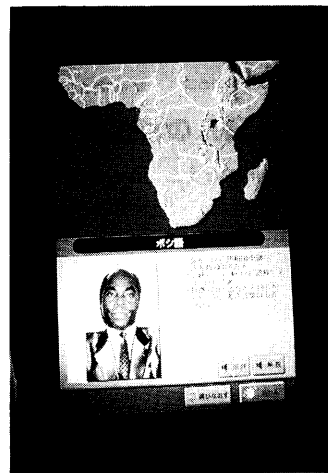
2



3

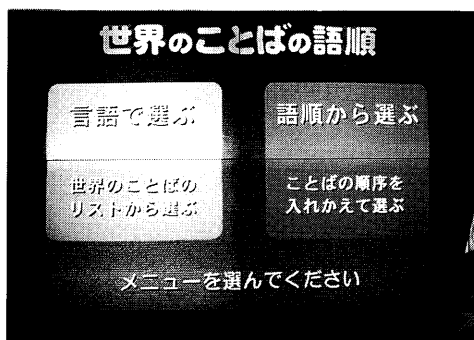


4

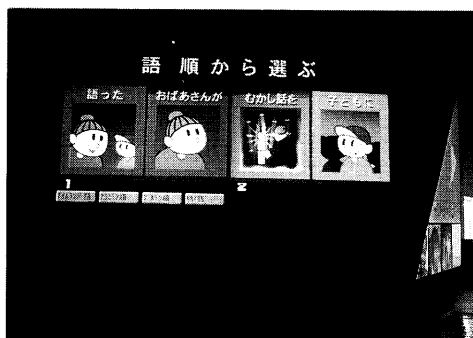


5

写真 語順装置検索システム (6点)



1



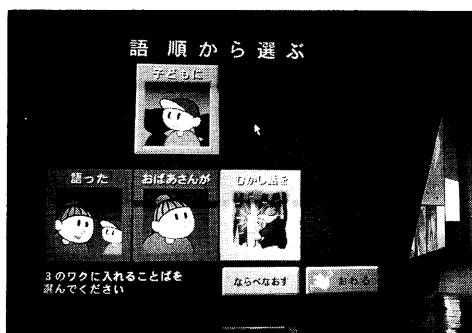
2



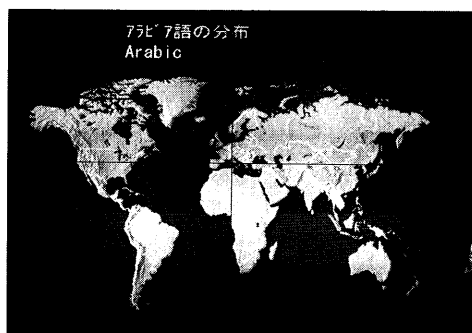
3



4



5



6

表：言語分布・系統装置、語順装置に入力された言語名（公開年度）

	言語	分布・系統装置公開年	語順装置公開年
1	アイヌ語	1996	1996
2	アイルランド	1996	1996
3	アチェー語	1997	1997
4	アベラム語	1996	1996
5	アムハラ語	1996	1996
6	アラビア語	1996	1996
7	アルバニア語	1996	1996
8	アホム・マレ語	1996	1996
9	イ語	1996	1996
10	イタリア語	1996	1996
11	イスラエト語	1996	-
12	インドネシア語	1996	1996
13	ヴェトナム語	1996	1996
14	ウイグル語	1996	1996
15	ウェールズ語	1996	-
16	ウオロフ語	1997	-
17	ウドムルト語	1996	1996
18	ウルドゥー語	1996	1996
19	エヴェン語	1997	1997
20	エストニア語	1996	1996
21	オランダ語	1996	1996
22	オリヤー語	1996	1997
23	カシュミール語	1996	-
24	ガノンガ語	1996	1996
25	カレリア語	1996	1996
26	カレン語	1997	-
27	カンナダ語	1996	1997

28	キチエ語	1996	1996
29	ギャロン語	1996	予定
30	ギリシャ語	1996	1996
31	クルク語	1996	
32	グルジア語	1996	1996
33	クルト語	1996	1996
34	クンウィニク語	1997	-
35	ケザ語	1996	-
36	ケチュア語	1996	1996
37	ケレウェ語	1997	-
38	コシャエ語	1996	1996
39	コダグクールグ語	1996	-
40	コモックス語	1996	-
41	コリヤーク語	1997	1997
42	サーミ語	1996	1996
43	サポテク語	1996	1996
44	サンスクリット語	1996	1997
45	サンタール語	1996	-
46	ジャワ語	1997	-
47	スウェーデン語	1996	1996
48	スクマ語	1997	-
49	スペイン語	1996	1996
50	スワヒリ語	1996	1996
51	スンダ語	1996	1996
52	ソロモンピジン語	1996	1996
53	ゾンカ語	1996	1996
54	タイ語	1996	1996
55	タミル語	1996	1997
56	チヤン(羌)語	1996	-
57	チェコ語	1997	1997

58	チベット語	1996	1996
59	チャム語	1997	-
60	チンポー語	1996	1996
61	ディヴェヒ語	1997	1997
62	テルグ語	1996	1997
63	ドイツ語	1996	1996
64	ドゥモ語	1997	1997
65	トクピシン語	1996	1996
66	トラジャ語	1996	1996
67	トルコ語	1996	1996
68	ナワトル語	1996	1996
69	ニャキュサ語	1997	1997
70	スクオロ語	1996	1996
71	ネネツ語	1996	1996
72	ネパール語	1997	1997
73	ネワール語	1996	-
74	ハイダ語	1996	-
75	バジョ語	1996	1996
76	バスク語	1997	1997
77	バラオ語	1996	1996
78	ハンガリー語	1996	1996
79	パンジャーブ語	1996	1997
80	ビルマ語	1996	1996
81	ヒンディー語	1996	1997
82	フィリピン語	1996	-
83	フィンランド語	1996	1996
84	フラマン語	1997	1997
85	フランス語	1996	1996
86	ブルトン語	1997	1997
87	フルフルデ語	1996	1996

88	ペー（白）語	1996	1996
89	ペルシャ語	1996	1996
90	ベンガル語	1996	1997
91	ポーヌペイ語	1996	1996
92	ボシ語	1996	1996
93	ポルトガル語	1996	1996
94	マダガスカル語	1996	1996
95	マラーティー語	1996	1997
96	マラヤーラム語	1996	1997
97	マリ語	1996	1996
98	マレー語	1996	1996
99	マンシ語	1996	1996
100	モンゴル語	1996	1996
101	モンゴル語	1996	1996
102	ヤクート語	1996	1996
103	ヤムデナ語	1996	1996
104	ヤラハタン語	1996	1996
105	ユカギール語	1996	1996
106	ユピック語	1996	-
107	ヨルバ語	1996	1996
108	リンガラ語	1996	1996
109	ルーマニア語	1996	1996
110	ルカイ語	1997	1997
111	ルバ語	1996	1996
112	ロシア語	1996	1996
113	ンゴニ語	1997	1997
114	英語語	1996	1996
115	回語	1997	-
116	韓国・朝鮮語	1996	1996
117	上海語	1996	-

118	中国北京語	1996	1996
119	日本語	1996	-
120	琉球語	1996	-
	ラトビア語	予定	予定
	マルタ語	予定	予定
	イディッシュ	予定	予定
	リトアニア語	予定	予定
	フィジー語	予定	予定
	ポーランド語	予定	予定
	ギルバート語	予定	予定